

秋山罷斎——近代崎門学者の肖像

白井 順

一、はじめに

本稿は、桑名市立中央図書館秋山文庫所蔵文献を基礎資料とした秋山罷斎の交友に関する一考察である。秋山罷斎に関する専論は、糸賀国次郎「秋山罷斎先生」¹があるのみで、詳しい事跡についてはあまり知られていない。秋山罷斎は、明治から昭和に至るまで、道学者として生計を立てた稀有な人物である。桑名という東京・大阪から離れた土地にあって、哲学館（現・東洋大学）教授であった内田周平や肥前の道学者楠本碩水らと交流し、東西の岐門を繋げる役割を果たした。本稿は、明治という新しい時代、道学者をとりまく環境が一変した状況において、秋山罷斎の人間関係を解明し、残された資料から崎門文献がどのような経路で作られていたのかを展望しようとするものである。

周知のように、崎門学派は濃密な人間的交流なしには成立し得なかった学派である。山崎闇斎派の文献は濃厚な人間関係の中で生成されたものであるが故に、その筆写と学術継承もまた濃い人間関係によって支えられている。崎門文献は筆写によるものであるからこそ、誰から借りた本を写したのか、誰の手による筆写なのかということを明らかにしなければ、その筆写本の真の意味を理解することは難しい。しかしながら、従来その思想面ばかりに注

目して崎門の特徴として論じられる傾向にあり、交流の内容を明らかにする研究は多くはない。本稿は、書簡を基本資料として、秋山罷斎とその周辺にいた人物との交流の経緯や実情を明らかにしようとするものである。例えば、肥前の儒者楠本碩水『過庭余聞』²には次の様にある。

秋山罷斎ニハ、逢ウタコトハナイガ、段々文通ハシタゾ。識見モアリ、自得ノ処モアリ、方今デハ実ニ得ガタイ人ゾ。罷斎ハ一点ノ俗氣ガナイヤウゾ。感心ノ人ゾ。

このように、交流をしていたことは周知の事実であっても、具体的に何が語られていたのかを知るのは容易くない。楠本碩水は晩年失明し、甥の正翼を通じて秋山罷斎と書簡による交流をしていただけでなく、楠本正翼（海山）自身も秋山に師事し、学問的な質問のみならず濃密な人間関係を築いていた。柴田篤「鳶魚斎詩文―明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿」³には、楠本正翼が秋山罷斎に宛てた文章が翻刻され、現在長崎ミライオン図書館には秋山罷斎が批正を加えた楠本正翼の『論語疑目』・『孟子疑目』などが残されている。また、長崎市立歴史文化博物館にも秋山罷斎に関わる資料が残されている。また国士舘大学附属図書館には、楠本正翼へ宛てた書簡集『罷斎先生書翰』（全四冊）が所蔵されている。現存するのは明治三十一年～明治四十一年五月の間のもので、二人の交流の具体的な事実を裏づける貴重な資料である。これまで、楠本正翼側から見た研究では柴田篤「楠本海山覚書」⁴に言及があるものの、楠本正翼と秋山罷斎の書簡を突き合わせてみたものではない。本稿では、これまで全く知られていない新資料として桑名市立中央図書館秋山文庫所蔵『東西雁魚』を用い、秋山罷斎とその周辺の人々との交流の具体的な事実を明らかにしたい。『東西雁魚』は、秋山罷斎宛ての書簡集である。

二、秋山罷齋について

秋山勝機（嘉永二年～昭和四年、一八四九～一九二九）、桑名藩最後の藩儒。諱は断。罷齋と号し、晩年には希叟・蘆窓・蟾山と別号する。嘉永二年十一月、桑名城内柳原に生まれ、幼名は鈴木於菟夜又といった。後に次郎助と改め、秋山断と改称し、名を勝機、字は子勿とした。父の秋山白賁堂（諱は固。初諱は勝鳴、字は叔先、幼名は五郎吉、のちに五郎治）は陸奥白河の生まれで、廣瀬蒙斎に学び、当時南合果堂・加治紫山と三秀才の称があった。文政六年二十六歳の時、江戸に出て昌平黌に学び、奥平棲遲庵・山口萱山に就いたのみならず、崎門四為会や麴溪書院の講筵に赴くなど崎門学を信奉していた。

罷齋は八歳の八月に立教館に入学し南合果堂の門人となり、同時に大塚晩香の家塾に入り勉学した。この時小山正武と同期である。父や兄の勝剛（寒緑）と同様、生来の近眼で他の児童と共に遊ぶことができなかった。十五歳より新陰流の剣術に励み、『加太邦憲自歴譜』所収「秋山断君経歴略記」によれば、慶応二年、十九歳の時に師範河合半兵衛より七つ訣を得たという。慶応元年十七歳のとき桑名に帰り、慶応二年より藩校句読師を勤め、同三年より父の京都勤番に随い所司代邸において句読師を勤める。京都勤番の時、秋山白賁堂は大塚晩香ともに読書所創設の命を受けて書籍の購求のことも掌っていた。

明治元年（一八六八）鳥羽伏見の戦いで、桑名藩は幕府軍の中枢となり兵を出す。明治元年の東下か恭順かを諮る開城協議について記した「桑名開城顛末」⁷に次の様にある。

早速教授秋山五郎治を呼び出して下問しました所、秋山答えて申しまするには今日の勢東下は亦事情止むを得

ざることならん、然れども唯勝手に城を棄つるに於いては徳川氏に對し委託の任に背く故、此城を守り之に當る者あるに於ては差支えなしと、斯く申しました。

この秋山五郎治こそ、罷斎の父・秋山白賁堂である。明治二年、致仕して鈴木蝸庵と称した。

『三重先賢伝』には「東海道ノ関門桑名城外川口港警備の任ニ就キ土佐ノ俊傑坂本龍馬ヲ一蹴セリ時二年二十尋イテ明治元年正月東海道鎮撫総督瓜生実梁ノ大軍ヲ帥ヒテ桑名城ヲ包围スルヤ蠟山復タ主戦論ヲ主張シ同志ヲ叫合シテコレヲ死守セシカ衆寡敵セス加フルニ多クノ離反者ヲ出シ城遂ニ陥レリ」とあり、この「蠟山」とは罷斎のことである。明治四年罷斎二十三歳の時、廢藩置県により桑名藩は桑名県となった。明治政府はちよんまげ禁止令を出す、罷斎は終生それに従わず、昭和までずっとちよんまげであった。罷斎は文学館補教に任命されたが病を理由に任に就かず、同年松平定信の伝記編輯掛、同六年御系図編輯掛を囑託された。明治七年四月十六日、秋山罷斎二十七歳のときに父・白賁堂が亡くなった。『統桑名昔話』には、桑名藩士で新選組隊士であった高木貞作から秋山罷斎に宛てた書簡が挙げられているように、彼とも交流があった。¹⁰このように明治維新の激動の中、秋山罷斎は藩儒から教師の道へと転向した。明治十三年には一色町共学所の夜間教授となり、この年に通信局勤桑名在勤となった舞田敦（一八六一～一九二二、養浩、脱斎）が秋山の門下となった。¹¹明治十四年には觀興文庫を創設し、勤王の事に関する書を集めて大義を明らかにし、後世を「感觀興起」しようとする。その歳に吉田英厚（士發、為斎）が入門した。当時罷斎はもう片方の眼も患い、不自由が生じていた。

明治十五年には舞田・吉田の勧めで京阪諸医の治療を受けることにし、その道中を記した記録『西上日記』¹²の巻頭には次のようにある。（引用文の標点は筆者が加えた。以下同）。

壬午夏、與吉田士發西遊京師、寓于環翠樓。蓋以舞田養浩之招也。留再旬、所歷七国、快興感不一、記以寓懷

云。蘆窓居士識。

この時に、舞田の伯父・飯田氏の住まい環翠楼を拠点に、罷斎にとっては曾遊の地である京都・大坂を訪れた。五月二日に出発し、七日には高麗橋の眼医長野某の所へ診察を求めている。二十日には旧知の儒者宮原（備後尾道の人、頼山陽に学ぶ）を訪ねた。その後、舞田が秋山と吉田を誘い京都四条の環翠楼にて語らう。

初舞田君遊我郷、踰年而西來京師、寓此楼。屢書以說其觀、且促余一遊。夫西京余曾遊之地、而其山水皆旧知識也。俯読來書、仰想曾遊、頗有会心之处焉。已而今也與吉田君亦來寓此楼。朝夕晴雨、皆與此翠相對、果有其会心处、而其奇觀則殆有加焉。一日舞田君、飯田君間所以名此楼。余答以環翠。因窃謂、山河襟帶、自然成城者、非此都之謂乎。而世事變遷、今非復古之平安城也。

十一月十八日にふたたび大阪の医者を訪れることになった。ところで、山崎闇斎派にとって『小学本註』は重要な文献であった。なぜならば、山崎闇斎が『小学集成』から「本註」即ち朱熹が『小学』に註を施した箇所を集めて作ったものだからである。罷斎は二十年來『小学本註』を求めていたが、この時の旅路でやっと入手することができた。その記録「壬午西遊後記」¹³には次のようにある。

（十一月）二十二日 晴。與士發歷訪書肆、得小学本註原本。古者小学原本不伝。本邦山崎先生表章之於集成中、始成小学本註。後淺見先生得原本於桑名而翻刻之。先考嘗得之本秘藏之、前年借某人而失之。爾來求之於三都、而不得焉者殆二十年、今而得之為可喜。

（略）

十二月一日 晴。與養浩士發、洒掃崎門四先生之墓、行薦儀於環翠楼、撤了機、講大学三綱領。會者舞田義道、吉田英厚、飯田兼之助、竹内久堅。夜歸寓、議事修法。蓋所以保諸先生墳墓也。

秋山は書籍を購入したり、闇斎らの墓参りをしたりして、崎門学者としての旅を満喫した。秋山は眼を患っていたが、文献に対する執着は相当なものであった。翌明治十六年、秋山三十五歳の十二月、「百一文庫目録叙」（平岡潤の標点・翻刻。秋山文庫仮目録に収録。）を記し、次のように言う。（□は不明な個所）

降而至廃藩之後、學術淆乱、書庫不鑰、神公菲惡之余澤、多士之所仰賴焉、一朝而蕩尽矣。見存者蓋數百卷耳。嗚呼、何其暴也。柳玘有言、成立之難如升天、覆墜之易如燎毛。言之痛心。嗚呼、不復忍言也。機既免職於廢藩之日、又辭官於擢用之際、連遇廢黜、屏居修旧學、側聞書冊之蕩尽、心竊惻焉。既而又聞立教館庫之書与燕室左右之冊、往々鬻暴於街上也。慨歎之余、一二購求、得經史雜書數十卷、其他何限焉。而寒生微力、亡滅而不救、壞爛而不収。視之於全庫、何啻千百之十一而已哉。固無足言也。□區々之心、窃感神公菲惡之德、思多士之所賴与藩屏之所閱焉、又□念機之所嘗仰賴焉。筐之奉之、曰百一書庫。聊以致微衷。因列其目、序其由、諗後之読書者、以神公之德終不可謬、學術之正邪不可不弁、而斯書之不可以不読焉。

このように、秋山は廃藩後の學術の衰退を目の当たりにし、「百一文庫」を創設した。街に売り出された『五經大全』『聯珠詩格』『文会筆録』などを購入し百一文庫として、觀興文庫とは別に保管をした。¹⁴当時の秋山にとって、觀興文庫・百一文庫を創設せねばならぬほどに學問に対する深刻な危機意識があったということがこの序文から窺える。

明治十六年六月、三上是庵門下の石井周庵が中心となり、道学協會が創設され、『道学協會雜誌』が刊行された。道学協會は道学者の墳墓の保存と遺事の蒐集、道学關係の圖書及び遺物の蒐集保存、道学文献の刊行を活動の目的として創設された。秋山罷斎の門人舞田脱斎・吉田英厚は明治二十三年に道学協會に加盟するが、方針の違いで翌二十四年八月に袂を分かつ。その歳、明治二十四年三月十四日、秋山は東京での眼の治療を思い立つ。東京に在住

する舞田と吉田英厚（士発）・英実（士善）兄弟からの誘いを受けたからである。途中、名古屋で細野要斎の門人永井以保（石村）及び堀田克斎に会う。その旅行記『養痾日程』（秋山文庫所蔵）には次のようにある。

廿四日 晴。読全稿。養浩帰。午下士発至。全行而出駒込竜光寺、拝稻葉迂斎先生及武井敬勝翁墓。

東京では内田周平とも会っており、崎門に関わらず諸先輩・著名人の墓を参拝している。内田周平とともに小石川の伝通院前の書肆を訪れたりしている。

廿八日 雨。士善夙至、共上野観音閣。養浩先在、士発亦至。桜花稍綻。至図書館、閲韞藏録及諸書数部、間抄録一二。有係家系者、養浩為余写之。坂井生亦来会。館有楼上楼下。下混雑而上静閑、余全行就楼上、一人可借三十卷。

（略）

四月一日 陰。已而晴。伊藤生書至、読全稿。養浩至、士発亦帰。午下士発有故赴横浜。與養浩歴観書肆。始見一齋所校刻呉志忠本四子。又見諸礼抄略新発田侯藏板。浩軒侯所編有自序。養浩買筆紙。喫餅日暮、傭車而帰。夜吉田丈人見訪、井上兄来訪。喜邂逅、閑話数刻帰。養浩亦去。夜半士発帰。横浜問宇高氏携筆記数部而来。有久米先生筆記、默齋先生家礼抄略講義等。此日発郷書。

五日（略）観浅草観音堂、遊書肆、見周子全集及数部書。

（略）

嗟、余久病、家計亦艱、何遑遠遊、而有此行者、皆舞田吉田坂井三子之力也。其往還之資、淹滞之用、医治之費、余蓋不與焉。其帰也、餞贐尽意。呉本四書、余嘗托士発、此行士発為余購之。周子全集、近思録講義、通書解附説、與二子全行所得、皆附余。養浩又別餞冬至文。且二家礼遇懇至、使余忘旅與貧、何其情之切也。世

俗澆漓、而見此敦厚之風。豈特余之幸而已哉。余既感其厚誼、又不敢自私也。帰郷之月廿七日、断識。

文中の「浩軒候」とは即ち新発田藩主溝口直養のことである。また「呉志忠本四子」「呉本四書」とは嘉慶年間に刻された『四書章句集注』のことで、佐藤一斎が覆校して安政二年（一八五五）に勝村治右衛門等から出版されたものである。「周子全書」やその他書籍の購入費だけでなく、往復旅費・滞在費・治療費も舞田・吉田らが負担をしていた。罷斎は眼が悪くても崎門文献に執着し購入するだけでなく、わざわざ東京上野図書館に行き、資料を筆写するなどしている。

父・白賁堂が越溪書院での講義を集めた『崎門経義編』（全三冊、秋山一六八）の続編として、崎門の講学文献を蒐集した叢書（筆写本）『続崎門経義輯編』（現存十四冊、元は三十二冊）を編纂した。秋山罷斎は、明治二十一年から二十七年にかけて、尾張の永井以保（石村）や中村修から借りて尚斎派の文献を筆写している。例えば『続崎門経義輯編』所収『朱易衍義筆記』の巻末には次のようにある。

右朱易衍義筆記一卷、尾府内庫図書道学資講卷之三三七所収、明治二十一年、就尾張永井君借之。謄写之業、起三月上旬終四月初八日、卷中朱書青書者、今以墨写之、各加原色、点於其上兮、註文長者則大書之而低一字。明治二十六年八月には『桑名前脩遺書』を校正し、刊行した。この刊行には、桑名の門人佐治為善が関わっている（月費払込は佐治宛であった）。規約によれば、月費金十銭前金で、毎月一回十五日に発行することになっていた。規約に「校正は秋山先生に囑託して承諾を得たり」とあり、秋山自身が直接携わっていた作業は校正で、秋山の編集でないことは、例えば『桑名前脩遺書』第七「澹庵先生遺稿、東陵先生遺稿」に父・白賁堂の筆記稿本に拠ることが巻末に記してあることから分かる。梅沢芳男「明治時代の崎門学」¹⁵には「舞田・吉田両氏の事も附記せねばならぬ。両氏は協会を脱会するや、別に旗幟を伊勢の桑名に飄し、明治二十四年より二十七年にかけ『桑名前脩遺書』

二十六号を、次いで雑誌を発行し道学協会と拮抗した」とあるが、舞田・吉田はすでに東京におり、作業を手伝っていたとは考えにくい。吉田英厚は明治二十七年に朝鮮に渡り、翌年に大坂梅田郵便電信局官舎に住み、その後水戸南町に住んだ後転任となり、小田原郵便局に勤めている。舞田も二十七年には甲府稲門村に住み脱然書院を開き、その後東京へ転任し、牛込区矢来町三番地に住んでいた。

明治三十年六月四日、兄・寒緑が逝去。同年十一月、その篤行を表彰され金品を賜り、篤好書屋を篤好書院と改める。明治三十一年からは温知会の活動を始める。明治三十三年「勢海一滴」(『樂翁公と教育』¹⁶所収)を記した。秋山が松平定信(樂翁)の教育政策を敬慕していたことは、別の著作からも分かる。寛政の改革を推進した松平定信は白河で藩校立教館を創設したが、文政六年の国替で桑名入りした息子の定永は、それにちなんで桑名伊賀町に同名の藩校を設け子弟に学ばせた。以来、桑名では松平定信の教化遺風がそのまま根付いたと言われ、「樂翁」と呼ばれ親しまれていた。また明治三十六年には文華堂から出版された『みどりの竹…樂翁公御遺事一班』も秋山の著作である。本書は松平定信の行状の中で青少年にとって教訓となるべきものを分かりやすく説いたものである。この後、桑名温知会で明治三十七年から九度にわたって(明治四十一年には『みどりのたけ』¹⁷)を出版している。明治四十二年には、吉田英厚は山形旅籠町に在住、明治四十三年には篤好書院同窓会が結成され、吉田英厚・中山正心・中山正明・糸賀国次郎・舞田敦が出資人となり、毎年お中元・お歳暮として、八円(四十年)五円(四十三年)・七円(四十五年)が罷斎に贈られている。眼鏡(四十三年一月七日)なども送っている。その後、舞田・吉田らは尚徳会を創設し、大正十三年に「観興」を刊行。大正十四年には旧主松平子爵より尚徳會の美学を賛し金一封が會に贈られた。『桑名市史(補篇)』によれば、昭和三十五年四月二十日に新屋敷真如寺に於いて秋山断先生追悼法要がいとなまれた。

三、秋山文庫について

今回用いる新資料『東西雁魚』について述べる前に、秋山文庫についてまず紹介しておかねばならない。秋山文庫は、松平定信時代の藩校教師であつた秋山白賁堂が開いた白賁書院を基とする。桑名藩関係の自筆本や写本など約三千五百冊。この元となっているのは白賁書院書庫である。桑名市内新屋敷真如寺の北側にあつた白賁書院書庫に、白賁堂・長子寒緑・次男罷斎の遺書約一万四千冊が収蔵されていた。昭和三年十一月に罷斎八十歳の誕辰に当たり、この記念事業として門下故旧が結成した尚徳会（幹事種瀬包直・塚本左次郎・鵜飼演広その他七名）がその遺著の永存を図つた。昭和四年十一月十三日、八十一歳で罷斎は逝去、生涯独身を貫いたので、その親族中に家を譲るべきものがなく、又養子をもらうこともなかつたため秋山家は断絶に至る。白賁書院文庫は門人舞田脱斎・吉田英厚・中山正心・中山正明・糸賀国次郎が継承することになった。

『平岡潤遺稿…桑名の文化』所収「秋山文庫始末記」によれば、昭和二十八年ごろ朝日新聞の吉田記者が白賁書院書庫の荒廢した状態を写真入りで報道し、それが口火となつて表面的に同書庫が問題化することとなつた。二十九年以降尚徳会と市教委の交渉を経て、三十三年十一月に市へ同文庫が移管されることとなつたが、一時的にも保管する適当な場所がなく、やむなく鎮国守国神社宝物館裏の土蔵内の一部を借用していた。しかし、蔵書を入れる箱などを用意しているうちに、昭和三十四年九月二十六日の伊勢湾台風の襲来となつてしまつた。新屋敷一帯は域南干拓地及び地蔵からの高潮の波浪にのまれ、文庫付近は二メートルの浸水地帯となり、長期間冠水し文庫のほとんど大部が汚泥と潮水に浸かつた。秋山又策は浸水を免れた二千六冊の和漢書を寄贈した。この後浸水した

一千冊以上の書籍が洗浄されたあと、段階的に寄贈されることとなった。この間の作業に携わっていた桑名市立図書館嘱託の平岡潤は、昭和三十五年六月「寄贈秋山文庫仮図書目録」（第一次）、昭和三十六年三月「伊勢湾台風被災秋山文庫図書目録」、昭和三十九年十二月「第三次寄贈秋山文庫仮図書目録」を作成している。その第三次目録によれば、「舞田文庫」「大塚蔵書記」「竹陵井上氏蔵」「片山」等の旧蔵書も入っている。つまり水害に遭うまでは、秋山文庫は桑名の歴史資料をはじめ、崎門文獻の一大集積庫であった。現在千二百九十部、三千八百三十三冊、昭和十二年八月に糸賀国次郎が挙げた秋山罷斎の著書は次の二十九種である¹⁹。

（大学より論語里仁に至る）筆記、大学経文筆記、論語集註筆記、罷斎筆録、易経本義筆記、経餘劄記、読語類、養痾日程、談話筆記（『温知余筆』所載）、講話（桑名修養講演会修養講演録所載）、みどりの竹、樂翁公遺事、古今喪制略、西上日記、壬午西遊後記、読書話、蘆窓日なみ、燈下話餘、中筮法、略占法、罷斎先生師訓録、篤好餘筆、後録、不尽小筆、雁帛餘筆、話餘、簡牘餘筆、篤好餘潤、桑海餘光

吉田英厚が作成した『白賁書院書庫（秋山文庫）目録』（以下『秋山文庫目録』と略称）は、吉田英厚が市村子勝に大正十五年十二月から昭和二年八月までの間に、文庫に架蔵するものを書かせたものである。市村子勝（秋山文庫目録には「士勝」とある）とは、市村理吉のことである。²⁰吉田英厚は蔵書を十八分類し、以下のように順序を並べている。

①白賁堂先生②寒緑先生③罷斎先生④秋山家⑤経類⑥史類⑦集類⑧歌類⑨雑類⑩兵書類⑪武鑑類⑫桑名類⑬百一文庫⑭観興文庫⑮幅物⑯板額⑰刀劔類⑱法帖

この①には『立教館御蔵書目録』だけでなく、『嘉永三年家蔵書目』（散逸）・『家蔵書目』・『秋山家譜』・『秋山家系譜』『秋山家由来書』などが収められている。③には、奥平定時の『礫川遺書』（現存）・『罷斎手記』（現存）・『温

知余筆』（現存）・『藩学伝』（現存）・『西上日記』（散逸）・『養痾日程』（現存）・『陸奥九家世記』（現存）・『壬午西遊後記』（散逸）などが分類されている。『西上日記』・『壬午西遊後記』等は楠本正翼が筆写しており、その写本が長崎ミライオン図書館に現存する。また現存しないが『針生寄録』という碩水関連の文献もあったことも記してある。

⑤経類は閩裔派文献を基本として『道学雜誌』『崎門学脈系譜』に至るまで蒐集している。この経類にも奥平棲庵の『奥平翁真伝説』（散逸）が含まれて秋山文庫らしさがある。⑥史類は『会津旧事雜考』（全五冊、現存）・『会津四家合考』（全十二冊、現存）・『白川古事考』（全六冊、現存）・『長島志』（全一冊、現存）などが収められていた。

⑦集部には桑名で刊行された『端山先生遺書』『碩水先生詩草文章』『碩水遺稿』などが収められる。⑧桑名類には、『鏡公遺事』（全一冊、現存）・『休否録』（全一冊、現存）・『三和録』（全三冊、現存）、『前脩遺書』（全九冊、現存）などが含まれている。⑨観興文庫には、吉田英厚作成の『秋山文庫目録』によれば、嘗ては『観興文庫規則』（第十七号）及び『感興文庫入庫書類』が存在していたようだが、現存しない。観興文庫には『朱子語類』をはじめ、『白鹿洞書院揭示』『朱子実記』『朱子行状』『朱子訓蒙詩』といった朱子学の基本書籍が集められているが、尊王論の『蒲生君平遺稿』や吉田松陰の『慨士遺音』なども含まれている。糸賀によれば「同志と謀りて観興文庫を創して、勤王の事に関する書を主として集め、以て大義を明にし後生を勧誘鼓舞せんと志された」という。²¹

水害によって散逸した資料が惜しまれるが、本文庫のこのような分類体系が秋山罷斎の学問を物語っていることは言うまでもない。そしてこれらの書籍の蒐集過程を知る道しるべとなるのが、『東西雁魚』である。秋山罷斎の高弟たちは勤め先の都合で遠方にあり、普段は書簡によって交流するほかなかった。『東西雁魚』に収録されている書簡は、舞田敦・吉田英厚・中山正心（仲誠、聞斎）・中山正明（伯公、持斎）・楠本正翼をはじめ、江間政発・春名斯文・生田格・田原鋼三郎たちが罷斎に宛てたものである。吉田英厚が作成した『秋山文庫目録』によれば、『東

『西雁魚』には四十三冊あつたはずであるが、現在残っているのは二十五冊のみである。明治三十一年戊戌（一八九八）、同三十二年己亥（一八九九）、同三十九年丙午（一九〇六）、同四十年丁未（一九〇七）、同四十一年戊申（一九〇八）、同四十二年己酉（一九〇九）上篇下篇、同四十三年庚戌（一九一〇）、同四十四年辛亥（一九一一）上篇下篇、大正一年壬子（一九一二）上篇下篇、同二年癸丑（一九一三）上篇下篇、同三年甲寅（一九一四）上篇下篇、同四年乙卯（一九一五）、同五年丙辰（一九一六）上篇下篇、同六年丁巳（一九一七）、同七年戊午（一九一八）上篇下篇、同八年己未（一九一九）、同九年庚申（一九二〇）、期日不明若干冊。各冊に振られた番号から、約半分ほど散逸したことがわかる。各巻は『桑名前脩遺書』の反故紙や『道学遺書』（道学協会、明治二十六年）の反故紙などで表紙が付けられている。

四、楠本正翼について

ここからは、秋山文庫所蔵『東西雁魚』を用いて、話を進めていきたい。楠本正翼（海山、君翔）は明治三十一年五月、桑名に来訪し、秋山の指導を受けた。²²当時楠本正翼は二十五歳、秋山は四十九歳であり、親子ほどの年の差である。楠本正翼はそれ以来、秋山に師事し交流は頻繁であつた。『東西雁魚』に収録される楠本正翼の書簡も一月に一通以上あり、大きな割合を占めている。明治三十一年五月、楠本正翼が秋山のもとにいた際、秋山所蔵の朝鮮本を筆写している。例えばすでに指摘があるが、国士館大学楠本文庫所蔵の『退陶先生言行通録』（李退溪撰、朝鮮権斗経等）編全八巻存二巻一冊は、吉田士発が朝鮮で入手して罷斎のもとにあつたのを楠本正翼が写したものである。²³秋山には朝鮮儒学、特に李退溪へのまなざしがあつた。吉田英厚も明治二十七年に朝鮮へ渡った際に、退

溪年譜（朝鮮本）と『退溪文集續集』を入手している。楠本の親友である舞田も韓国在勤となり、明治二十七年より舞田脱斎は全羅道の江景に住んでいた。明治三十九年三月十七日、楠本正翼は秋山に宛てて次の様に言う。（□□は不明瞭な字）

舞田丈ニハ韓国に停留之事に□□御家族も渡韓之由人情風情之異ナル処多少之不便ヲ免レズト存候…先般京城在勤之丸山警務顧問之周旋ヲ以テ退溪先生言行録三冊ヲ借用シ謄写仕候同書ハ吉田丈之携帯セラレタル言行録とハ異撰ナルモ大要ハ相似タリ吉田丈之言行録ヨリ後ニ出来タルモノニシテ前之言行録之粗漏ヲ補正シタルニハ凡例ニハ有之…

明治三十九年六月四日の楠本へ宛てた書簡に秋山は「退溪先生言行録三冊丸山警務顧問周旋至し御謄写相成也。好き御都五月三十日付貴書謹領」とある。このことについては裏打ちする文章を楠本碩水が残している。明治四十一年十一月二十一日の楠本書簡には次のように述べて、鄭圃隠のことを秋山に紹介している。「近來東京之友ヨリ朝鮮ノ鄭圃隠集ヲ貸りて一覽仕候此圃隠と云ハ文会筆録ニモ相見ヘ申居リ名夢周号圃隠高麗朝の人ニテ朝鮮に於る理学の祖と申す事に御座候然るに集は詩のみにて文は僅々數篇に過ぎず」。また明治四十三年十月、舞田は「清国内府覆刊宋咸淳本周易本義君翔ヨリ贈呈ノ由□□候朝鮮ニハ偶々佳本モ有之ナレドモ敦在住ニハ極メテ罕」（文中の君翔は楠本正翼のこと）と秋山に全州の状況を嘆いている。明治四十四年楠本の書簡に次の様にある。

頃來李退溪文集看読仕候退溪篤信程朱讀書行事務めて程朱之真意を得へんとする有様元明諸儒不及に非ず我崎門之學風は全く退溪より出たるもの多しと存じ候但中に真西山に実する一条有之前紙字覽ニ供申候聖學輯要を著したる李叔猷（名珥、号栗谷）退溪門人にて綱翁此人乃説を見て靖猷遺言に論定有之候退溪當時此論盛なりし為め物に此弁駁を為したるものと存じ候

大正元年十一月十四日に舞田は秋山に宛てて「河西集（八冊）、慕齋集（六冊）右御還付被下成」とあり朝鮮儒者金麟厚の河西集を送っている。明治三十九年四月十一日の秋山書簡には「近來韓國珍書刊行会ナルモノ組織有之広ク會員募集之広告新聞ニ相見ヘ申候刊行予定之書目ヲ見レバ一向ニ珍しき且ツ有用之書も無之凡そ歴史及政事書類ニ有之」とある。大正になってから朝鮮儒学に関する書籍を研究していた形跡が窺える。大正五年一月の楠本書簡には次のようにある。

先日申上候鶴峯集一通り完了仕候（略）正集四冊続集三冊附録三冊嘉永四年重刻ナリ元文四年朝鮮信使ニ与ヘタル書トテ日本陶国興トシタル書一通附録ニ在リ我国ニ在リシ時ノ鶴峯遺事遺文ヲ尋合セタルニハ合ヘタルモノ此書ニテモ中々国体君命ヲ辱メサル模様相見ヘ申候も至極略ニテ不詳ものと存候陶国興ハ日本太学士と有之も果して何人ナルカ分り不申候退門八賢ト倡申候ハ奇高峯。趙月川。鄭寒岡。李良斎。金雪月堂。琴日休堂。柳西厓。金鶴峯。西厓ハ懲毖録を著シ又退溪先生年譜ヲ著ス

『鶴峯集』は、朝鮮の金誠一の文集であり、彼は天正十八年（一五九〇）七月、日本通信正使として来日、京都で豊臣秀吉と会見した。帰国後、西人派の正使黄允吉が日本の来襲を予告したのに対し、東人派で副使の金誠一は日本の来襲はないと主張した。楠本正翼は李退溪門人と『鶴峯集』²⁵に見える陶国興との関係について関心を抱いている。大正八年旧暦元旦の楠本書簡には「退溪文集活字出版之事始めて承り申候」とあり、往復書簡には頻繁に朝鮮儒学のことを書かれ、残念ながら対照すべき罷斎側の書簡が残っていないものの、このように楠本や舞田が朝鮮本や朝鮮儒学の情報を秋山に逐一伝えているという事実に基づけば、秋山は朝鮮儒学についても深い関心を抱いていたことが分かる。

楠本正翼が桑名を去ってから間もなく、秋山は再度上京し河本博士の手術を受けたが、視力は回復しなかった。

秋山は温知会の活動を始めた。もちろん楠本も会員である。『温知余筆』卷一所収「温知会第一回席上秋山先生談話」（明治三十一年十二月十二日）には「諸子ハ予ニ上京中ノ談話ヲ求メラルト雖眼病治療ノ外ニハ出遊ノ暇少カリシヲ以テ格別語ルベキ事ナシ然レドモ此ノ席ニ臨ミテ黙止シ難ケレバ聊學術上ノ事ヲ述ヘテ其實ヲ塞カント欲ス」とある。第二回は明治三十二年六月十七日、およそ半年後である。

前回ニモ述ベタル如ク予ノ区々トシテ道学ヲ説ク所以ハ今時道学ノ衰廢ヲ憂ヒテ之ヲ維持挽回セント欲スルノ微衷ナリ今前緒ヲ繼テ之ヲ述ベントスルニ当リ先道学ノ二字ヨリ解説スベシ²⁶

このように秋山は述べて道学の解説を始めるが、最後に「余は旧藩学伝来ノ孔孟程朱ノ学ニ仕立テラレシ者ニテ讀書ヲ知リテヨリ常ニ先輩ニ就キテ講説談話ヲ聞キタレドモ幼少ノ折冲深ク心ニ入ラズ二十歳以前ノ学ハ兒戯ノミ其後漸ク心に会する所アリ是ヨリ一意道学ヲ修メシガ恰も廢藩」と述べ、句読師時代の学問を卑下する。

明治三十二年秋山五十一歳、『温知余筆』卷一卷頭の「題温知余筆」で次のように言う。

論語曰温故而知新。集註曰、学能時習旧聞、而每有新得、則所学在我、此蓋学之要也。近者郷里諸子創一会、名曰温知、意在于此也。余又為草此余筆、以資其温知。今也道学衰廢、人不知講之、余常慨焉、則此余筆之述、豈徒爾哉。余於此會有望焉。諸子幸勉旃。余病累之余、亦不敢自棄也。明治三十二年六月、機題。

明治になって道学者たちが次々にこの世を去り、その学問が失われてしまうことを秋山は危惧していた。地元の有志は秋山の談話を求め、その談話を筆記して会費を集めて参加者に配布する方式で活版が作成された。右には「郷里の諸子」とあるが、筆記者の星野恭蔵は『桑名前脩遺書』の校訂者であり、佐治為善（省軒または鶴坡と号す。『鶴坡詩存』²⁷あり）は桑名藩の世臣で教育家で漢詩人であった。高島量次郎（鷹州または楓園と号す。『桑陽振起編』²⁸あり）は桑名藩士で、長年小中学教育に従事した人物で漢詩人でもあった。²⁹牛窪亀五郎・岩瀬六蔵・石山七郎・辻市

治郎・入澤源藏彼らが中心となり、編集と発行を担っていた。吉田『秋山文庫目録』では『温知余筆』全二十一冊とあるので、明治末年まで刊行していたことが分かる。片山恒斎の孫で、徳川慶喜の伝記編纂事業に参与していた江間政発も温知会の会員である。³¹『温知余筆』は月刊雑誌のようなスタイルで編集された文献である。その巻一の巻頭「前脩録」に次のようにある。

『前脩録』ハ先考ノ嘗テ起草シ玉ヘル冊子ニシテ其ノ上巻ハ三宅先生ニ始マリ世ノ教授諸先ノ事ヲ記シ其下巻ハ世ノ学頭ニ及ビ別ニ附録アリテ学識外諸先ノ事ニ及ベリ嚮ニ前脩遺書ノ編アル其上巻ハ之ヲ前脩遺事中ニ掲ゲタリ今亦其下巻以下ヲ此ニ録シ以テ前脩ノ遺風ヲ後進ノ士ニ知ラシムト云爾。

活動開始当初は、桑名の有志がメンバーなのを氣遣って、父・白責堂が編集した『前脩録』に則って桑名藩の先輩に関する事から始めた。『温知余筆』各冊には「学談」と題する崎門諸先輩の文献抄録があり、「迂斎先生学談筆記」「迂斎先生国字筆記」「佐藤直方先生学話抄」「久米訂斎含輝集抄」等といった内容を掲載している。その中でも奥平棲遅庵の『礫川遺書』中の「東聞録」「総遊話録」「再遊話録」「丁巳所聞く」の各抄には、「機謂」という形で罷斎の見解が附してあることは注目に値する。また各冊に必ずあるわけではないが、「学談附録」と題し、苦学・修身・読書といった崎門学概説のようなものもある。その他、桑名に関わる記録史料を「勢海一滴」と題して罷斎が編集したものを連載していた。更に各冊巻末には、「席上秋山先生御講話」を載せ、「講話録」は半年に一度のペースで開催された秋山罷斎講演の記録であり、毎回異なる人が筆記をしている。『温知余筆』巻九、「学談」には、「碩水先生事略」を載せて、次のようにある。

今や道学天下ニ明ラカナラズ先輩大家漸ク逝テ帰ラズ後進ノ士賢々焉従フ所ヲ知ラズ此有志者ノ常ニ長歎息ニ堪ザル所ナリ。抑今日ニシテ先輩大家ノ現ニ存スル者ヲ天下ニ求ルニ独リ肥前ノ楠本碩水先生有ルヲ聞クノミ

今や高齢古稀ニ躋リ矍鑠尚壯ニシテ依然斯学ヲ其郷ニ講ジ玉ヒ実ニ一世ノ望タリ近者先生ノ令姪君翔丈ヨリ左ノ事略一通ヲ寄示セラル因テ今此ニ謹写シテ以テ読者ニ示シ其高風ヲ仰ギ觀感シテ以テ斯学ニ興起スル所アラシコトヲ庶幾ス 明治三十四年十月二十七日 機 謹書

楠本正翼が記した『楠本碩水先生事略』は、碩水の最初の伝記というべきもので、正翼が碩水古稀の祝いに備えて書いたものである。秋山は明治三十四年九月二十三日に楠本へ「碩水先生事略老通謹頌：御事略之全文他日温知余筆中に相写」（『罷斎先生書簡』）と許可を求める返信をした。そしてそれを正翼に送り、最初に掲載したのがこの『温知余筆』であった。³²同年十一月二十四日に秋山が楠本へ宛てた書簡には「端山先生御遺書此度御印刷之成同志之人々に御配書」とあり、楠本が秋山に『端山先生遺書』について相談していたことが分かる。明治三十四年十二月十九日に秋山が楠本へ宛てた書簡には次のようにある。

故先生御遺書ノコト御再示東京ノ見積り意外高価（略）此事過日佐治に話諸処佐治申スコトニハ東京ハ印刷ノ手際モ宜キ丈高価ニシテ田舎ニテハ手際ハ劣リ申モ廉価ニハ当地ノ如キハ大凡温知余筆ニテ御承知存候四日市ノ印刷会社ノ如キハ県下尤廉価ニ何レにても若シ問試之可申候

明治三十六（一九〇三）年六月、楠本正翼は『訂正増補崎門学脈系譜』『碩水詩草』『碩水文章』を桑名で印行、同年九月二十七日には正翼は『端山先生遺書』四冊を刊行した。明治三十六年七月二日の書簡で秋山は「過般ハ学脈系譜活版出来忝部」と言う。『崎門学脈系譜』が話題に上るようになったのは、秋山のもとに正翼が来た明治三十一年からで、楠本の七月三十一日書簡に「崎門学脈系譜モ未だ写所不仕：」とあり、同年八月四日の秋山の返信には「崎門学脈系譜のコト」とある。そして同年八月二十四日の楠本の書簡に「先日は崎門学脈系譜一冊 鄙疑目一綴差出候已に御落手」とある。上文中の「疑目」とは楠本が自らの解釈を記した冊子のことである。秋山文庫

所蔵『続崎門経義輯編』には「先輩授受之序」「学脈系譜」と題した筆写「崎門学脈系譜」が収められている。『訂正増補崎門学脈系譜』は、明治二十四年の碩水序文、明治二十五年の舞田と吉田の序文、そして明治三十一年十二月の楠本正翼の跋文を載せ、秋山罷斎のことは一切出てこないが、この出版に関わっていたことが裏付けられる。

出版以外にも崎門資料を提供しあうこともあった。明治三十二年十月十日の秋山書簡に「碩水叔父先般来天木翁ノ遺書搜集仕居候東京尾州ニモ御伺申上候天木先生ノ遺書ハ至極乏しく又成書ノ分不多様ニ存候」とあり、同年同月十六日の秋山の返信には「老先生近日天木翁遺書御搜集ノ由」と述べ、永井以保所蔵本の伝本であると来歴を明らかにして、天木時中の著作四篇（「甚矣吾衰章筆記」「対策」「浅野臣復讐論」「義士問答」）を挙げている。明治三十九年三月十七日の書簡には、「前書訂斎先生書牘は先般購入仕候法華貞正ノ書中に有之。同シキモノ忒部有之一日一部進呈仕候此書牘ハ含輝集中にも多分無之事と存候」という。この『訂斎先生書牘』は秋山文庫に現存する（秋山文庫七二七）。明治三十九年九月十二日の楠本書簡には「先日ハ温知余筆第十四卷ヲ拝見」とある。

『梅堂崎門未刊書目』について明治三十九年六月四日秋山は書簡で「別封崎門未刻御蔵書目壹冊御写送被成重ね重ね御厚誼之程千万難有存一通拝見仕候処機未読ノ書多相見へ」という。同年五月三十一日の楠本書簡に「先般差上候崎門未刊書目之中御入用之書籍ハ被仰越度学覧ニ供シ可申候小子死後ハ蔵書ハ一併ニ東京図書館ニ寄付可仕存候」と死後の寄贈計画を述べる。同年四月十一日の楠本正翼からの返信には「崎門未刊書目は先年上京之節、舞田丈及内田兄様と名目編纂交換之事」とある。『梅堂崎門未刊書目』は楠本正翼が目睹した崎門文献目録であるが、これもまた秋山文庫に現存する（秋山文庫九三）。

楠本は明治三十一年から、経書にける不明な点を「疑目」として纏め、秋山がそれに批答を書入れをした。明治四十年二月二十七日の楠本書簡には「邵子ノ天根月窟閑来往都是春ノ解釈ハ如何」とあり、それに対して明治四十

年三月十七日、罷斎は次の様に返信した。

邵子天根月窟閑来往三十六宮都是春ノ二句陰陽循環一陽來復之意ヲ云レシ者ナルベシ上句乾遇巽時為月窟トアレハ月窟ハ巽下乾上姤卦ニテ陰之地逢雷時見天根トアレハ天根ニ震下坤上復卦ニテ陽之姤ハ一陰下二生シ復ハ一陽下二生ス故ニ窟ト云ヒ根ト云フ天根月窟閑来往ハ陰陽自然ニ循環シテ陽來リ陰往クヲ云如此ニシテ陽來リ陰往テ一陽來復スル時ハ八卦三十六宮ヲ面シテ都テ是レ春意復動到ラサル所ナキヲ云カ

「天根月窟都是春」³⁴は邵雍の詩に基づく易学的解釈で、これについては三浦國雄が詳細に論じている。朱熹の解釈を山崎闇斎が『文会筆録』で引用して以来、崎門で扱われるテーマではあるが、取り上げられるのはそれほど多くはない。この詩は王龍溪によって心学的展開がもたらされたのであるが、秋山の見解を見る限り易学的理解に留まっている。明治四十三年四月十一日の楠本書簡には次の様にある。

都下ニハ目下井上哲次郎一派之哲学と功利を是とする陽明学の大流行之内先日内田遠湖が浅薄なる陽明学之流行と題する一論駁文ヲ草して雑誌に登載せんとするも凡そ井上一派及陽明学崇派之為めに登載を拒絶され不得已無名通信と云う雑誌に登載したる事を伝承仕居候遠湖も文筆ハ稍長するも兎角人之批評を免れず正学唱導之任に当るに足らず願クハ脱斎丈躬行心得之学を以て士子之表率となり士子をして泰山北斗之或あらしめハ彼実学之徒燭火螢光之一たび太陽に逢て其影を消滅するが如く今日之猖獗毫亦憂るに足らず

楠本正翼は内田周平の論文³⁵について、その経緯と論文に対する批評をストレートに秋山に語っている。東京の学問トレンドが陽明学へと移り行く中で、秋山罷斎は哲学館で陽明学を教えた東正堂の高弟・生田正庵と面識を得る。

五、生田正庵との交流

明治四十三年庚戌（一九一〇）、楠本正翼は生田格（吉卿、正庵）を秋山に紹介した。生田は明治四十一年五月に針尾に碩水を訪ね、教えを乞うている。時に碩水七十七歳、生田三十九歳であった。生田正庵と楠本碩水との交友関係については、荒木見悟が詳細に論じているので、ここでは触れない。明治四十三年十月、楠本正翼は秋山に次のような書簡を認めている。

播州姫路の在 神崎郡田原村に生田格名中孚字吉卿号正庵明治四年生 王学ヲ好み少年之頃周防岩国の東澤瀉に従学し後京都に出て久しく禪ヲ参じ後又稍程朱の学に向い一昨年春当地に來り数日滞在して歸り爾來崎門の遺書を熟読中之所頃年有書來る其中に曰く朱子学の正統は崎門の諸書に由らざる可らず愚見には佐藤を主にして浅見三宅の遺書を参照精究セバ治学を得べく云々

生田は秋山に書簡を奉じた。明治四十三年（一九一〇）十月五日、生田が秋山罷斎に宛てた書簡には「先般正翼氏より聞く一書を修し先生の御示教を請い」とあり、面識を得たことが分かる。また同年十月舞田が秋山に宛てた書簡に「播州生田格ト云人氣象佳ナルベキ由可喜候」とあり、秋山は舞田に生田に会ったことを報告していたことが分かる。同年十一月に生田は、為替壹円を添えて、秋山に宛てて次のように書簡に記す。

聖賢之書を読み理を露して其真に迫る処に至れば微妙の真理は必ず心と融じ超然として俗を脱することを得可申と存候若シ極らずして只俗を脱せんとする表面ハ俗を脱するが如く相似テ其實ハ頑固と相成候と存候又徒に古人の書を読んで其の所見を場に就テ不正只独学にて種々の書を読まば仕す其説に左右サレテ五里霧中の中ニ葬

られ大路ニ出ル日も無之と存候惑と知と惑ふものは無之共惑と知らずして惑ふて居ルハ独学の大患と有之候独学の苦心御憐察を垂れ御示教被下度

翌年正月十日、生田は秋山に自分の『博文約礼』の訂正と書室の額「魯修書室」の揮毫を依頼する。このとき生田は『論語』雍也篇の「君子は博く文を学びて之を約するに礼を以てせば、亦以て畔かざるべきか」の一文についての論文を同封し、秋山へ郵送した。同月二十日の生田の書簡には「博文約礼ノ説愚意申上御正し被下千万難有存候御書中呉々の御教訓堅ク相守可申候」とあり、秋山が早速の返事を出していたことが分かる。その生田の書簡には次の様にある。

小生小学近思録四書其他玉講附録等も読居候共一向其味不覚只 先生の書を仰クヨリ外無之事と存候論語中余り義理ニ亘リ其決定ニ六ヶ教処ハ是ヲ我身上ニ引当テ此場処ハ将ニ工夫を用ユレバ我心ニ会得スルカト苦慮候処も問々有之候嘗テ集註ハ一字ヲ加減スベカラズ承リ居候処今日 先生ノ御教訓集註ハ一部ノ経ト心得大切ニ講究セヨトノ御仁命ニヨレバ愈々其心得ニテ講究可仕候集註ノ旨ヲ得ルニハ一々 先生ニ就テ質問ヲ得ルニ至リ兼至極残念ニ存候茲ニ集註ノ本意ヲ得タル先輩ノ書ハ至極稀ナル由其書ヲ選択スルニハ必ズ 先生ノ御示教ヲ受ケテ求度モノト存候

秋山は生田の論文に対して厚意的な教示を与え、生田もまた秋山の教えを頼りにすると言っている。荒木「生田正庵小伝」によれば、生田は同じ時（明治四十四年）に楠本碩水にも『博文約礼』の論文を送り、示教を求めている。この事実から生田にとって秋山罷斎は楠本碩水と同様に尊敬する人物であった。ちなみにこの生田の書簡には額幅を明記し、「天道下済而光明地道卑而上行」という『周易』謙卦象伝の詞を揮毫してほしいと秋山に頼んでいる。翌年一月、生田は秋山に「魯修書室記文」の訂正を依頼した。これは生田自身が書いたもので、東正堂が書いた（『藏

春閣文稿』五所収)「魯修書室記」とは別のものである。

近日其記文章稿仕候之共一向不得要領先生之御叱正を御煩申は実に恐入次第存候一其御憐察被下御叱正御願申度候其魯修之意に親切ナラサル所又ハ其用功之間違タル所等御示教御願申度候恐縮之至ニ候共別ニ先生之御訓示ヲ賜リ先生之御文章一文御起稿を草し候ニ至ル事を得ハ陋生之幸甚此上も無き事と存候

生田は続けて「先生之御先君ハ貴堂先生之由貴堂先生之御碩儒ナリシ事ハ嘗承り及ヒ追慕」と言い、「遺墨拝見仕度存候幅之大小ニ拘り不申候何卒一葉御払を御願」と白貴堂の遺墨惠贈をお願いした。二月十五日の生田の書簡には「魯修室記文御起稿被下候御熹忝相承仕候御情瞻を以テ何卒御製作奉願候魯之性質ニハ敬之意ニ近き所アルニヨツテ敏ニ勝ル事カト存候此処後便序ニ御示教御願申度存候」とあり、秋山は生田のために「魯修書室記文」を記した。更に「御先君貴堂様之御遺墨後便何か御割譲被下様々御厚意」と見え、秋山が白貴堂の遺墨を送ったことも分かる。大正二年二月十九日の書簡に生田は「先生御認被下候魯修書室記紙面其小にして表装都合悪しく候附半切位の紙面ニ御揮毫御願申度存候」と秋山へ揮毫を再度お願いしている。

秋山と生田の交流はこの後も続き、大正三年元旦には「先生の著書又ハ言行録月刊に相成居由残本カ有之候は御譲を御願申訳」と言い、「月刊」すなわち『温知余筆』を求めた。その後、同月十六日の書簡には「御高著御恵與被下千万難有」と謝辞を述べ、『温知余筆』十四冊を受け取った。そして更に同月二十三日には、書名は分からないが秋山より著書を二冊受け取っている。

以上の事は、荒木見悟「生田正庵小伝」³⁷および吉田公平「生田正庵年譜稿」³⁸にも指摘がない新たな事実である。対照するべき秋山罷斎の書簡が残されていないのは残念ではあるが、本稿では調査の中間報告として事実を指摘するに留めたい。秋山と生田の関係はこの後も続き、大正三年十二月二十一日、楠本が秋山へ宛てた書簡には「生田

吉卿学問兎角陸王之旁往ニ彷徨仕候」と述べ、生田が陽明学へ転向していることを秋山へ伝えている。また大正六年八月六日、楠本が秋山へ宛てた書簡には「生田吉卿ハ今都下ニ行往申候目下小石川区大塚坂下町護国寺（九四）に居り」と姫路から東京に転居したことを伝えている。このように生田正庵の学問変遷のなかで、秋山罷斎の存在が影響を与えていたことが分かるのである。

六、今後の課題として

本稿では、上述のように、人間・秋山罷斎が門人どのような交流をしていたのかという事を主に書簡を通して分析してみた。今回取り上げたのは、そのごく一端で、他にも崎門学に関わる議論や批正を加えた資料もあり、膨大な資料の全貌と言えるものではない。しかしながら、これまで全く紹介されることのなかった秋山文庫および秋山罷斎の著書『西上日記』・『壬午西遊後記』・『養痾日程』および「百一文庫序」を通して、罷斎の交友関係と著述に関わる情報を提供した。そして書簡資料『東西雁魚』によって、これまで知られていなかった楠本正翼や生田正庵との交流を紹介した。今後の課題として、秋山文庫所蔵の崎門文献を更に調査し、その「肖像」に迫りたい。

1 『山崎闇斎と其門流』伝記学会編、昭和十三年刊、所収。

2 『楠本端山碩水全集』（葦書房、昭和五十五年）三四六頁。

- 3 柴田篤「鳶魚斎詩文―明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿」、『九州中國學會報』三十三号、一九九五年。
- 4 柴田篤「楠本海山覚書―ある崎門学者の生涯と著述」、『香椎潟』（四九）、二〇〇三年。
- 5 『加太邦憲自歴譜』昭和六年刊、三二四～三二七頁所収。
- 6 『三重先賢伝』、玄玄莊、昭和六年刊、六二頁。
- 7 加太邦憲「桑名開城顛末」、『三重県史談会会志』第五卷第壹号、大正三年八月。
- 8 『三重先賢伝』、玄玄莊、昭和六年刊、七頁。
- 9 不破義幹『統桑名昔話』桑名宗社、昭和五十一年、五頁。
- 10 不和義幹『統桑名昔話』桑名宗社、昭和五十一年、二十七頁。
- 11 『山崎闇斎と其門流』、伝記学会編、昭和十三年刊、三三九頁。
- 12 長崎ミライ on 図書館所蔵（楠本正翼筆写本）
- 13 長崎ミライ on 図書館所蔵（楠本正翼筆写本）
- 14 清水則夫「大東文化大学図書館所蔵『綱斎先生全集』について」（『明治大学教養論集』四九二号、二〇一三年）には「罷斎による觀興文庫の創設が、（舞田）敦に影響を与えたことはほぼ確実である」とある。しかしながら、舞田に觀興文庫が影響を与えたという証拠を私はまだ確認し得ていない。
- 15 『増補山崎闇斎と其門流』伝記学会編、昭和十八年、三六一頁～三八三頁。
- 16 秋山断「勢海一滴」はまず明治三十三年十月発行の『温知余筆』第四巻にて公刊され、その後和田綱紀編『楽翁公と教育』（九華堂、明治四十一年出版）に同文が収録された。
- 17 秋山断編『みどりのたけ』、進文会、桑名温知会蔵版、大正四年第九版。
- 18 『桑名市史（補篇）』、二六五頁。
- 19 『山崎闇斎と其門流』、一八〇～一八一頁。

20 三浦國雄「大東《漢学》の一側面―市村理吉と四為斎文庫―」、『大東文化大学漢学雑誌』第五十一号、四七頁、二〇一年。

21 『山崎闇斎と其門流』、一六二頁。

22 『贈舞田養浩序』（長崎県立歴史文化館所蔵『文稿』）「聞勢州有秋山罷斎先生者久矣。乙未之冬遊浪華会吉田士発悉其学徳將往謁之而不果。今茲戊戌之夏奮然東上初拜大廟遂謁于先生、留於門下二旬」。前掲の註3柴田氏の論文に翻刻がある。

23 柴田篤「楠本家三代の家学と退溪学」、『中国哲学論集』三一・三二号、二〇〇六年。

24 『楠本端山碩水全集』（葦書房、昭和五十五年）所収『碩水先生余稿』巻三「丸山重俊在韓國遺寄示退溪言行録詩以謝之」、三〇五頁。

25 『韓國文集叢刊』所収『鶴峯先生文集』附録巻四「日本陶国興。與花山士人趙相觀書」。

26 『温知余筆』巻二。

27 『鶴坡詩存』（昭和九年刊）佐治の序文によれば、一九一五年に居を東京に移して以来漢詩人として暮らす。『鶴坡詩存』は七十七歳を記念して刊行されたもの。享年七十八『鶴坡詩存』には「豪山秋山先生古稀寿詞」「哭舞田脱斎」「展豪山先生墓」などが収録されている。

28 志水雅明『発掘街道の文学 二』（伊勢新聞社、平成十六年刊）、一三八―一四一頁参照。

29 『桑名市史補編』、昭和三十五年、二九八頁。

30 筆者が実見した桑名市立中央図書館所蔵の『温知余筆』は巻十四（明治三十八年）までである。

31 伊藤信夫編『桑名人物事典』、三四頁「江間些亭碑文」参照。

32 明治三十五年十月二十三日に『碩水先生古稀引翼集』が出版されるが、そこに秋山も文を寄せており、正翼の事略も巻末に収録された。その後、楠本碩水没後、大正七年に岡直養が中国漢口で出版した『碩水先生遺書』の巻頭に「伝」として収録されることとなった。

- 33 長崎ミライ on 図書館所蔵『罷斎先生批答論語』のこと。
- 34 三浦國雄「天根月窟詩の展開」、『中国文人の思考と表現』所収、汲古書院、平成十二年。
- 35 内田周平「朱子学陽明学に与へたる現代学者の謬見妄断」『無名通信』十二有名号、一九〇九年。
- 36 荒木見悟「生田正庵小伝」、『中国哲学論集』八号、一九八二年。
- 37 荒木見悟「生田正庵小伝」、『中国哲学論集』八号、一九八二年。
- 38 吉田公平「生田正庵年譜稿」、『井上円了センター年報』十六号、二〇〇七年。